

にいがた

# 北から南から



「新しいこと」と

私が子どもだった頃

山崎 徹

就職最後の勤め先になるだろうと思いがら出雲崎小学校に赴任して一年余り、いろいろな意味で「新しいこと」に出会うことになった。

今年度は、三年生の担任。七月に「総合的な学習の時間」に磯採集を行った。出雲崎の海岸で二時間ほどタモで小魚やエビ、ヒトデ、ヤドカリを捕ったりした。体育のプール水泳ではけのびがやつとの子も、嬉々として腰から胸まで水につかったりタモを使っていた。多くの子が初めての経験であり、子ども達は大満足。「磯採集で何を学ぶか」より、磯採集そのものが子ども達に意義のあることなのではないかと感じた。

しかし、四十五年前、私が子どもだった頃

海で遊ぶことは特別なことではなかった。夏休みともなれば、一日中海にいても希ではなかった。エゴグサ、テングサ、モゾクを海に潜って採った。エゴグサの見つけ方は、水の中で見ると先が曲がっていること、テングサは浅いところのものは茶色、深いところのものは黄色、そして、いいモゾクはより深いところにあることなどに気づいていった。

さすがにアワビはなかなか採ることはできなかったけど、サザエはよく採った。のみとげんのうを手には、潜って岩がきも採った。この年になっても、毎年一、二回はサザエを採りたくなる。

今では、出雲崎の海岸部の子どもでさえ海では泳がない。

同じようなことが他にもある。出雲崎小学校のクラブは「半日熱中クラブ」と言い、午後いっぱいを使い活動する。昨年は「海遊びクラブ」があった。磯釣りをしたり、発泡スチロールで作った筏に海で乗ったり……。

私が子どもだった頃は、魚釣りは学校で取り組むことではなかった。八月の末になると



ハゼ釣りが始まる。竹の釣竿で、餌はミミズやヤドカリ。餌の付け方や竿の引き方に気をつけながら釣った。釣り上げたハゼは母親に頼んで天ぷらにしてもらった。海が荒れた日にはシマチン（十センチに満たない小鯛）が釣れた。九月になると、今は寺泊水族館になっている辺りで膝まで水につかりタコを手づかみした。夕暮れの風、手づかみしたタコの頭を返しスミを取る。その感触は今でも忘れられない。特別うまいタコではないのだが、タコを捕らないと秋を迎えた気になれない。アサリを海に潜りバケツいっぱい採ったときもある。アオサも採った。三月半ばまでのアオサが一番うまい。油揚げと一緒に味噌汁にするとこたえられない。手こぎポトで防波堤まで渡り、アブラメ（アイナメ）やシヨを釣った。ハチメやキスはなかなか釣れなかった。一月と二月、浜に打ち上げられたモッコ（ホンダワラ）に付いているハタハタの卵を採った。塩茹でにした。今ではできない贅沢だ。

出雲崎小学校の裏は、「ほなみが丘」という里山になっていて校地でもある。ハイジブ

ランコや秘密基地など、子ども達の遊び場であるとともに、ワラビやゼンマイ・栗・さまざまなキノコが採れる場でもある。一年生が春にはタケノコを掘り、秋には栗を拾う。栗ご飯作りなどの活動に発展させていく。

私が子どもだった頃は、そういうことは学校での活動ではなかった。寺泊は海岸から道をはさんで里山になっている。秋には山栗を採りに行った。もちろん「秘密基地」を作り、チャンバラなどをした。冬にはうさぎを捕ろうとわなを仕掛けた。それらは、近所の子ども集団の遊びであった。

磯採集、海遊び、里山でのいろいろな活動「無農薬の共生田」、「大豆栽培と味噌・豆腐作り」：私は「新しいこと」に出会った。出雲崎小学校は豊かな体験をする条件に恵まれている。子ども達にとって意義あることと考えている。

が、私が子どもだった頃は、それらの多くは学校の外の日常の中にあつた。

（やまさき とおる・出雲崎小学校）